

幼児に対する命の教育プログラムの開発

—「死」を扱った絵本の読み聞かせを用いて—

水野 智美

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

<要 旨>

本研究では、死を扱っている絵本の内容を分析することによって、幼児に対する命の教育に有効な資料となりうるのかを明らかにするとともに、実際に絵本を幼児に読み聞かせることによって、命に関する幼児の認識がどのように変容するのかを明らかにすることを目的とした。

絵本の内容を分析した結果、「死んでしまうと、まわりの人が悲しむこと」「死者は人々の心の中で生き続けていること」「死後の世界はつらく悲しいものではないこと」のメッセージを含む作品が多く、幼児に命の大切さを伝えるための有効な資料になりうると思われた。

死を扱う絵本の読み聞かせを行ったことにより、死、葬儀、命に関する幼児の認識が若干ではあるが、適切な方向に変容したことが確認できた。ただし、1回限りの読み聞かせでは、変容の効果は大きいとは言えなかった。また、死に関する誤った情報をテレビアニメやゲームなどから得ていると、歪んだ情報が強烈な印象として残り、その後に認識が修正されないことがうかがわれた。

<キーワード>

命の教育、幼児、死、絵本

【はじめに】

低年齢の子どもによる凶悪犯罪、自殺等が相次いで起きており、幼児期からの命の教育の重要性が再認識されている（アルフォンス・デーケン，2001；近藤，2007 など）。我が国では、かつては大家族で生活しており、多くの場合、家庭の中で母親は子どもを産み、高齢者は死をむかえた。そのため、子どもたちは生命の誕生を人々がどれだけ待ち望み、喜んだか、高齢者がどのように老いて、死に至ったか、また亡くなることによってどのような感情を人々に残したかを生活の中で学習し、自然と命の大切さを実感することができた。しかし、現在では、核家族化、少子化が進み、子どもたちは生命の誕生や終焉に立ち会う機会が少なくなる一方で、テレビやゲームなどによって強烈な死の印象が与えられる機会が増えており、歪んだ情報

にさらされている。そのため、子どもに命の大切さを実感させることを目的とした教育を意図的に行うことが必要になってきた。

最近では、小学校や中学校の教師が創意工夫して行った命の教育の実践が報告されるようになってきている。例えば、幼くして病気や事故で亡くなった子どもを題材にして、一生懸命に生きることの大切さを伝えようとしている実践（金森，1996）、人間が食べるため飼育されている家畜動物を題材にした実践（黒田，2003；村井，2001 など）、臓器移植を取り扱った実践（鈴木，2009）、自殺、尊厳死などを扱った実践（佐藤，2001）、性教育を通じた実践（高橋，2009）などである。しかし、保育の場では、動物の飼育、植物の栽培をすることで終始していることがほとんどであり、子どもたちが人間の

命について考える機会は少ない。

命の教育を、幼児期から始めることが必要である理由として次の2点が挙げられる。第一は、幼児期から子どもは命についての概念を形成し始めていることである。これまでに行われた研究から、「死んだ人は生き返ることができるか」「死んだ人は身体を動かすことができるか」「自分や家族も死ぬのか」といった非可逆性、身体の機能の停止、普遍性などを子どもに尋ねて、幼児が死をどのようにとらえているのが明らかにされてきた（仲村, 1994；藤井, 2002；辻本, 2008 など）。これらの研究から、4歳以降になると死んだら身体の機能が停止すること、生き返らないことなどを理解できるようになってくることが確認されている。つまり幼児期には現実世界やテレビ、絵本などを通して、死とは何かを感じることができるようになっており、認知の面から見て、命の教育のための準備段階ができていけると言える。

第二の理由は、生や死に関する歪んだ情報にさらされる前に、適切な認識を形成することを目的とした教育を行う必要があることである。徳田（1994）は、正しい知識をもつ前に、ネガティブな体験や歪んだ情報にふれると、大人になってから効果があると言われる教育を行っても、認識が変容しないことを明らかにしている。つまり、命に関して不適切な認識を形成する前の幼児期に、予防的な効果をねらって命の教育を実施することが効果的であると考えられるのである。

幼児に命の大切さを伝えるためには死と対比する形で生を実感できるように導くことが有効であると考えられている（徳田, 2006）。また、身近な人の死に直面する経験のない子

どもが「死」を具体的にイメージし、死者に対するまわりの人の感情を理解するためには、死の場面が登場する絵本が活用できるのではないかと考えた。

そこで本研究では、死を扱っている絵本の内容を分析することによって、幼児に対する命の教育に有効な資料となりうるのかを明らかにするとともに、実際に絵本を幼児に読み聞かせることによって、命に関する幼児の認識がどのように変容するのかを明確化したい。

II. 研究1

(1) 目的

ひとの死を扱っている絵本には、どのようなメッセージがこめられているのか、また死を扱う場面の挿絵や記述は幼児が命を具体的にイメージできるような描写になっているのかを明らかにする。

(2) 分析対象

日本で発行されているひとの死を扱った絵本（日本語で書かれたもの）54冊（日本人作家の作品（以下、日本作品）30冊、外国人作家の作品（以下、翻訳本）24冊）、海外で発行されている絵本（以下、外国本）38冊（アメリカ7冊、韓国7冊、中国4冊、カナダ3冊、ドイツ3冊、台湾3冊、イギリス2冊、ラオス2冊、インド1冊、ベルギー1冊、ウズベキスタン1冊、ニュージーランド1冊、オーストリア1冊、カンボジア1冊、デンマーク1冊）を分析対象とした。

(3) 手続き

日本で発行されている絵本については、社団法人日本書籍出版協会の「データベース日本書籍総目録」およびインターネットで大規模に書

書籍販売を行っているサイト 2 社の検索画面において「死」「葬儀(葬式)」「命」「おじいちゃん」「おばあちゃん」「さよなら(さようなら)」「悲しい」のキーワードを用いて検索された本のうちから死を扱っていると思われる絵本、書籍やインターネットなどにおいて「命の教育」のための本として紹介されている絵本をすべて発注し、絶版、品切れ、増刷未定などを除いた 54 冊を入手し、分析した。

外国本については、海外を訪れた際に、その都市の最も大きな書店 2 軒に行き、幼児用の絵本のすべてに目を通し、「死」「葬儀」「墓」の場面が描かれている本を入手した。

(4) 結果

1) 絵本から与えられるメッセージ

表 1 に、死を扱った絵本から与えられるメッセージを計数した結果を示した。日本作品、翻訳本、外国本のいずれも「死んでしまうと、まわりの人が悲しむこと」を描いている作品が多いことがわかる。ただし、日本作品は、「死者は人々の心の中で生き続けていること」「死後の世界はつらく悲しいものではないこと」を描いている作品が少なく、死を悲しいものとしてのみとらえている傾向があった。なお、「死者は人々の心の中で生き続けていること」を伝えた作品には、亡くなった人に教えてもらったこと(例えば、料理やネクタイの結び方など)が日常生活の中に残っていることに気づくことができる内容、お墓の前に行けば死者と心の中で会話できることを伝える内容などがあつた。「死後の世界はつらく悲しいものではないこと」を伝えた作品には、死後はあたたかく穏やかな世界であることを描いていたり、死にゆく者が残される者に「死ぬことに恐怖はない」

と話したりする内容などがあつた。ただし、「死後の世界はつらく悲しいものではないこと」を伝える作品は、ひとが生きてから死ぬまでの過程を葉っぱやツララの一生に例えていたが、抽象的であるために、幼児には死ぬとはどのようなことかが具体的に伝わらないと思われた。

また、日本作品には、死の場面を扱っていても、その時のまわりの人の様子や感情、死とはどのような状態なのかが表現されていない作品が少なくなかつた(日本作品の 40%、12 冊)。このような作品は、「おばあちゃんは遠くに行きました」「ずっとねんねしたままでした」など、死んだことが明確に示されておらず、その時の状況を表す挿絵も描かれてなかつた。そのため、これを読んだだけでは、幼児は死をイメージすることがむずかしいと思われた。

2) 葬儀の描かれ方

葬儀は、人が死ぬとどうなるのかを学ぶことができる場である(徳田, 2006)。なぜなら、大人たちが死者を悼み、涙する場面を見ることで、子どもたちは死の重みを実感することができるからである。また、死者は火葬または土葬され、この世から姿形がなくなるが、大人たちが死者の思い出話をしたり、写真に話しかけたりする様子から、心の中に生き続けていることを子どもは感じることができるのである。

そこで、絵本の中で葬儀がどのように描かれているのかを分析した。その結果、葬儀に関する内容を扱っていた絵本は、日本作品 13% (4 冊)、翻訳本 33% (8 冊)、外国本 50% (19 冊)であった。日本作品では、3 冊に葬儀の様子が描かれていたが、3 冊ともに葬儀であると幼児が認識することはむずかしいと思われる挿絵

表1. 絵本から与えられるメッセージ

	日本作品 (30冊)	翻訳本 (24冊)	外国本 (38冊)
死んでしまうと、まわりの人が悲しむこと	37% (11冊)	71% (17冊)	66% (25冊)
死者は人々の心の中で生き続けていること	13% (4冊)	46% (11冊)	37% (14冊)
死後の世界はつらく悲しいものではないこと	7% (2冊)	17% (4冊)	16% (6冊)

(重複計数)

であった。具体的には、『おばあちゃん』(大森真貴乃作、ほるぷ出版)では大人が大勢集まって頭を垂れている様子を、『ゆずちゃん』(肥田美代子作、石倉欣二絵、ポプラ社)では死者を慰めようと参列者が風船を飛ばしている様子を、『ほろづき』(沢田としき作、岩崎書店)では火葬場の前で人がたむろしている様子(図1)を描いていた。葬儀に参列した経験やテレビなどで葬儀の様子を見たことがある子どもは、読み聞かせの際に大人が絵を解説することによって、その場面から葬儀であることを認識することはできるであろうが、経験のない子どもにとっては、この挿絵について説明を受けても、葬儀がどのようなものであるかを具体的にイメージすることは困難であると思われた。

葬儀の挿絵があった翻訳本、外国本には、棺や死者を描いている作品がほとんどであった。また、牧師が棺の前で話をして、参列者がその話を聞いている様子を描いたもの(図2)、棺を墓地まで運んでいく様子を描いたもの(図3)があり、葬儀は何をするものであるのかを挿絵から理解することができる作品があった。さらに翻訳本、外国本には、葬儀の際にまわり

の人が死を悼んで泣いている様子を描いた作品が目立った(図4、図5)。日本作品では、参列者が顔を手で覆っている、鼻を赤くしている様子が描かれているにすぎない(図6)が、翻訳本や外国本では涙の粒を描いたり、ハンカチで涙をぬぐっている様子を示したりしているため、まわりの人の悲しみが子どもに伝わりやすいと思われた。

日本作品では、葬儀に関して記述していたものは2冊のみであった。しかし、2冊ともに葬儀の一部を紹介したに過ぎず、まわりの人の様子や葬儀の意味については書かれていなかった。具体的には、「ゆずちゃんとおわかれの日。みんながふうせんをもってあつまった。ゆずちゃんのだいすきなふうせんをもってあつまった。」(『ゆずちゃん』)、「大きいおばあちゃんは木の箱に入って、ねむっているみたいだった。田んぼのまんなかにある火葬場のえんとつから、大きいおばあちゃんは白いけむりになって、空の上のにぼっていった」(『ほろづき』)と記されているのみであった。

翻訳本、外国本では、葬儀がどのように行われたのかについて詳しく示した作品があった。

例えば、『おじいちゃんの口笛』（ウルフ・スタルク作、アンナ・ヘグルンド絵、菱木晃子訳、ほるぷ出版）では葬儀が行われた礼拝堂の中にはオルガンが流れていたこと、黒い服を着た人が参列していたこと、牧師の説教の後に参列者が一人ずつ花を供えたこと、死者を慰めるための音楽を奏でたことなどが詳しく書かれている。『どこにいるの、おじいちゃん？』（アメリカ・フリート作、ジャッキー・グライヒ絵、平野卿子訳、偕成社）では、死んだおじいちゃんがよそゆきの服を着て、棺の中で両手を組み合わせて目をつむっていること、牧師による説教があったこと、ブラスバンドが悲しい曲を演奏したこと、参列者が泣いていたことなどについて、情景がわかるように詳しく書かれていた。また翻訳本、外国本には、葬儀に参列した子どもが棺の中で眠っている死者を見て、「死ぬとどこに行くのか」「どうなるのか」について大人たちに尋ね、自分なりの答えを見つけようとするものがあった。これらの絵本の中では、主人公の子どもたちは死者の肉体はこの世に存在しなくなることを葬儀を通して知るが、自分たちの心の中に死者が生き続けていることを次第に認識していくストーリーとなっていた。

さらに、葬儀の意味を説明している翻訳本、外国本があった。具体的には、『「死」って、なに？』（ローリー・クラスニー・ブラウン&マーク・ブラウン作、高峰あづさ訳、文溪堂）では、「お葬式や追悼会に行くのは、いっしょに、死んだ人のことを悲しんだり、たのしかったことを、おもいだしたりしたい、という気持ちを、家族に伝えるためです」と説明している。また、『「さようなら」っていわせて』（ジム&ジョアン・ボウルディン作、きたやまあきお訳、

大修館書店）では、「大切な人が死んだら、みんながあつまってさいごのさようならをいう。おそうしきはかぞくやお友だちがあつまって（ ）さんとのたのしかったことをいっしょにはなしあうんだ」（注：カッコ内は自分の大切な人の名前を書き入れるようになっている）と書かれていた。このような作品を何度も繰り返し読むことによって、子どもたちは葬儀とは何か、死とはどういう状態を指すのかをより具体的に考えられるようになると思われる。

3) 墓の描かれ方

墓参は、亡くなった人のことを思い出しながら心の中で話ができること、死者は遠くから見守ってくれていることを子どもに伝えることができるため、命のつながりを教えるのに有効であると考えられる。そこで、墓がどのように描かれているかを分析した。その結果、日本作品では墓が描かれていたのは1冊のみ（『いのちのまつり』（草場一壽作、平安座資尚絵、サンマーク出版）であった。その作品では、沖縄の墓参の習慣を紹介し、自分たちの命が先祖からつながっていることを説明していた（図7）。

翻訳本、外国本では、墓は子どもが気軽に遊びに行き、死んだ人のことを思い出す場所として描かれていた（図8）。また、墓に行くことを通して死者をいつまでも大切に思う気持ちが表現されていた。具体的には、亡くなったおじいちゃんを思い出しながら、毎日、墓に遊びに行く主人公の様子を描いた作品、主人公が墓の前で死んだおばあちゃんに話しかけたら、おばあちゃんが答えてくれたように感じ、おばあちゃんの肉体は墓の中で眠っているが、魂は自分たちの心の中に生き続けていることに気がついたという作品などがあった。

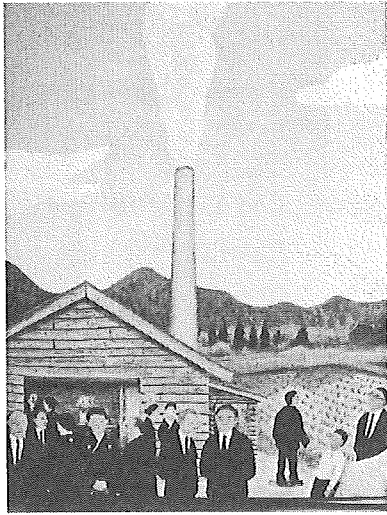


図1. 『ほろづき』より（日本作品）

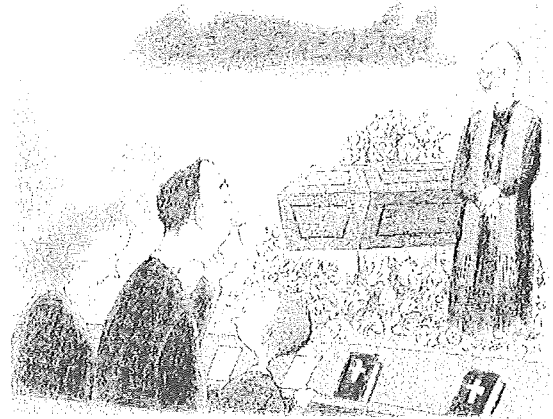


図2. 『おじいちゃんがおばけになったわけ』より（翻訳本）

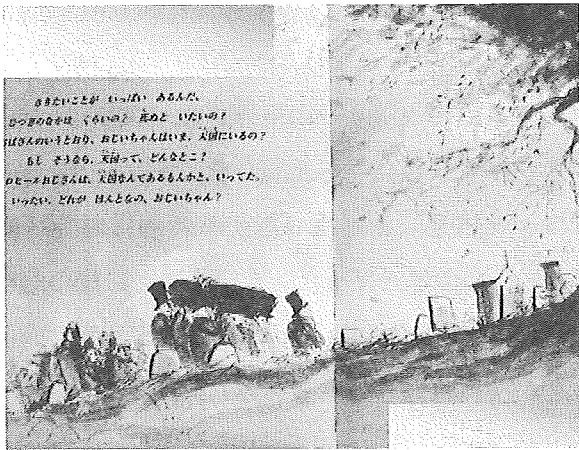


図3. 『おじいちゃん わすれないよ』より（翻訳本）

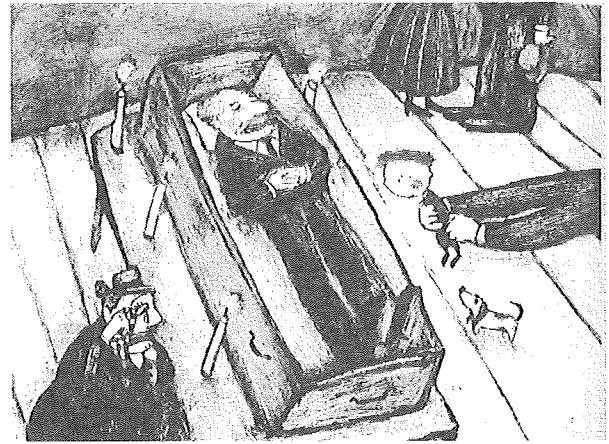


図4. 『Hat Opa einen Anzug an?』
（原語：ドイツ語）より



図5. 『 ខ្ញុំ ឆ្ងល់ ខ្លាំង ណាស់! 』より（原語：
カンボジア語）より

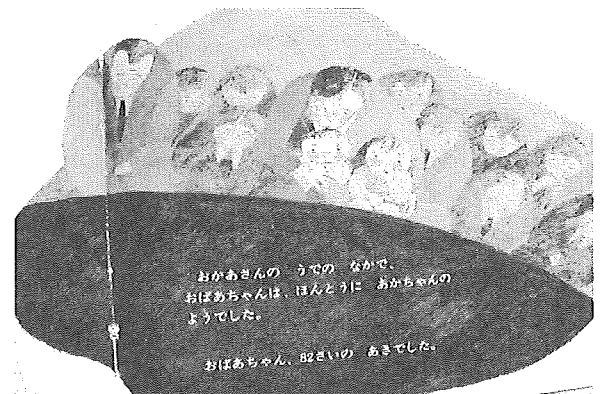


図6. 『おばあちゃん』より（日本作品）

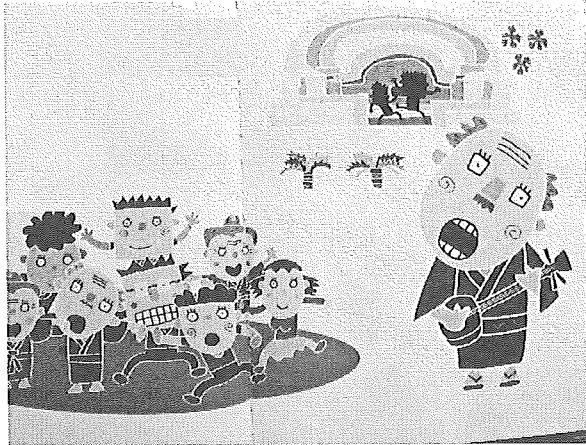


図7. 『いのちのまつり』より
(日本作品)

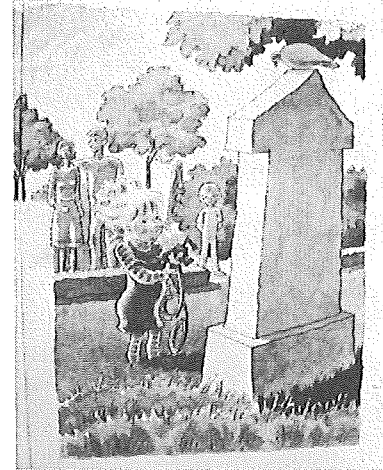


図8. 『Hvor gar man hen nar manger bort』
より (原語: デンマーク語)

Ⅲ. 研究2

(1) 目的

死を扱う絵本を幼児に読み聞かせ、読み聞かせの前後で命に関する子どもの認識がどのように変容したのかを明らかにする。

(2) 方法

1) 対象児

名古屋市内の幼稚園に通う年長児 24 名 (男児 10 名、女児 14 名)

2) 調査方法

以下の手順に従って調査を行った。

①プリテスト: 調査者が対象児を 1 名ずつ個別に別室に呼び出し、死や命に関する意識を尋ねた。なお、1 名あたりの所要時間は 8~10 分。

②絵本の読み聞かせ: 幼稚園の保育時間を利用し、『ミッフィーのおばあちゃん』(ディックブルーナー作、かどのえいこ訳、講談社、1997) を筆者が読み聞かせた。

③介入: 読み聞かせ後、1) 絵本の内容の確認、2) 死とはどのような状態であるのかに関する説明、3) 葬儀の説明、4) 墓の説明、5) 命の説明を行った (約 10 分)。

④ポストテスト: 対象児を 1 名ずつ別室に呼び

出し、死や命に関する意識を尋ねた。1 名あたりの所要時間は 6~8 分であった。

(3) 絵本のあらすじ

主人公ミッフィーの祖母が亡くなり、ミッフィーや家族はたいへん悲しむ。葬儀の後、ミッフィーは悲しみを乗り越えるためにお墓に行き、祖母の好きだった花を植える。お墓の前では、祖母が自分に話しかけてくれるように感じ、心の中に祖母が生きていることに気づく。

(4) 絵本を選定した理由

研究 1 より、幼児に対する命の教育を行う際に、幼児に伝えるべき内容として、以下の事柄が必要であると考えられる。

①命には限りがあること、②死によってまわりの人を悲しませること、③死んでしまうと、この世に存在することはできないが、人々の心の中に生き続けている (たくさんの思い出を残している) こと、④自分の命を大切にすること

『ミッフィーのおばあちゃん』は上記の①、②、③を文中に含み、幼児でも十分に本の内容を理解することができる判断されたことから本研究の読み聞かせの絵本として選定した。

(5) 結果と考察

1) 死別経験

身近な人や飼っていた動物が死んでしまった経験があるかどうかを尋ねたところ、11名(46%)の者がいると答えた。誰(何)が亡くなったかについては、ペット(犬、うさぎ、昆虫など)を答えた者が8名、祖母1名、知人1名、ゲームの中の架空の動物1名であった。

2) 絵本の理解度

絵本を読み聞かせた後、ミッフィーのおばあちゃんは怎么样了のかについて尋ねたところ、全員がおばあちゃんが亡くなったことを理解している発言をした。また、ミッフィーがなぜ泣いていたのかについても、おばあちゃんとの死別による悲しみであると全員が答えた。このことから、絵本のあらすじ(おばあちゃんが亡くなってミッフィーや家族が悲しんでいること)については概ね全員が理解できていた。

3) 死者に関する認識

プリテストにおいて、死んだ者は生き返ると思うかについて尋ねたところ、4名(17%)が「生き返る」と答え、19名(79%)「生き返ることができない」、1名(4%)「わからない」と答えていた。読み聞かせ後のポストテストにおいて、ミッフィーのおばあちゃんが生き返ると思うかどうかを尋ねたところ、「生き返る」と答えた者が4名(17%)、「生き返らない」と答えた者が20名(83%)であった。なお、プリテストで「生き返る」と答えた者のうちで、読み聞かせ後に「生き返らない」と回答を変化させた者は1名のみであり、残りの3名は「生き返る」と答えたままであった。また、プリテストで「わからない」と答えた者は読み聞かせ後に「生き返る」と回答した。プリテストおよびポストテストで「生き返る」と答えた者の中

には、テレビアニメで死んだ者が死神やゾンビとなって生き返るシーンを見ていた。そのため、ポストテスト後、筆者が生き返らないことを伝えても、「生き返る」という意見を変えることはなかった。

死んだ人と話をするができると思うかについてプリテストで尋ねたところ、2名(8%)ができると答えた。そのうちの1名は、テレビアニメで主人公が天国にいる人と会話するシーンを見たと話したことからそのように答えた。読み聞かせ後に、ミッフィーはおばあちゃんと話をするができると思うかについて尋ねたところ、12名(50%)ができると答えていた。そのうちの7名は「目をつぶっておばあちゃんのことを思い出せば、心の中にいるおばあちゃんと話することができるから」などのように、死者が心の中で生きていることを理由に挙げていた。このことは、絵本の中でミッフィーがお墓の前で目をつぶっておばあちゃんを思い出していたところ、おばあちゃんと話ができたと感じたように感じたと書かれていたこと、読み聞かせ後の介入で、目の前にいない人、死んでしまった人もそれぞれの心の中にいると伝えたことから、そのように考えるようになったと思われる。ただし、テレビアニメの影響を受けて、プリテストで「話をするができる」と答えていた者は、読み聞かせ後においても、プリテストと同様の理由を挙げており、読み聞かせや介入による影響を受けなかった。

4) 葬儀に関する認識

葬儀に参列した経験のある者は8名(33%)であった。また、プリテストで葬儀とは何をするところであるかを尋ねたところ、7名(葬儀に参列した経験のある者6名+参列経験のない

者1名；29%）が葬儀に関連した回答をした。ただし、そのうちの6名が「死んだ人のお参りをする」「死んだ人が箱の中に入っていて、その中に花を入れる」「知らないおじさんが来て、死んだ人によくわからない言葉を言う」「はげが来る」などと葬儀でとり行われている行為に関する回答をしており、葬儀を行う意味を答えた者は1名のみであった（「死んだ人にさようならを言う」と回答）。読み聞かせ後に同様の質問をしたところ、15名（63%）が葬儀に関する発言をした。そのうちの6名が「死んだ人にお別れの言葉を言う」「死んだ人に今までのお礼を言う」と回答していた。絵本の中でミッフィーや家族が葬儀の際に棺で眠るおばあちゃんにお別れやお礼の言葉をかけていたこと、読み聞かせ後の介入の際に「葬儀は誰かが亡くなった時に、みんなが集まって亡くなった人にお礼とお別れを言う会である」と伝えたことを覚えていたためであると思われる。また、プリテストの際に葬儀とは何かを答えられなかった者（17名；葬儀参列経験あり2名、参列経験なし15名）のうちの7名はポストテストにおいても葬儀は何をするところであるかについてわからないと答えており、2名は誤解（卒業式、お墓参り）をしたままであった。このことから、葬儀に参列した経験や家庭での葬儀に関する話題があることによって、葬儀に関する多少の知識をもっている者には絵本の読み聞かせの効果があるが、知識のない者には絵本を読み聞かせても、実際に葬儀をイメージすることができなかつたと言える。

5) 命に関する認識

プリテストで命とは何かを尋ねたところ、13名（54%）が何らかの回答をした。「生きてい

ること」と回答した者が8名、「心」3名、その他2名であった。また、プリテストで、命を大切にするにはどうすればよいかを尋ねたところ、9名（38%）から回答があり、「人を傷つけない」と答えた者が3名、「たくさん食べる」3名、「事故にあわない」2名、その他4名（複数回答）であった。その他に、「命をたくさん使わないようにする」と答えた者があり、ゲームの影響を強く受けていると思われた。

絵本の読み聞かせ後にプリテスト同様、命を大切にするにはどうすればよいかを尋ねたところ、プリテストで回答していた者はプリテストとポストテストとの回答の間にほとんど変化がなかったが、プリテストで「わからない」と答えた者（15名）のうちの6名が、「病気にならないようにする」「交通事故にあわないようにする」「友だちと仲良くする」などと回答した。

IV. まとめ

死の場面を扱う絵本の内容を分析した結果、「死んでしまうと、まわりの人が悲しむこと」「死者は人々の心の中で生き続けていること」「死後の世界はつらく悲しいものではないこと」のメッセージを含む作品が多く、幼児に命の大切さを伝えるための有効な資料になりうると思われた。しかし、なかには命を抽象的に論じている作品、ひとの死やまわりの人の様子や感情が具体的にイメージできない作品があり、これらは幼児に対する命の教育には適していないと考えられた。

また、日本作品には、①ひとが死んだことが明確に示されない（婉曲的な表現を用いる）、②人が死ぬとまわりの人がどのような感情を

抱くのかについての描写が少ない、③葬儀や墓参の場面が登場する絵本が少ない、④死の悲しみのみが強調して伝えられている作品が多いという特徴がみられた。一方、翻訳本や外国本の中には、①死者は人々の心の中で生き続けていることを示す作品が多い、②葬儀の場面を詳しく描写している作品が多い、③墓を死者と自分たちを結ぶ場所として描いているといった特徴があり、今後の日本作品に求められる要素があった。ただし、日本と外国では葬儀や埋葬の方法に多少の違いがあり、翻訳本や外国本で描かれた内容の中には日本の文化には馴染まない部分がある。今後、日本作品にも、日本の葬儀、墓参の様子などを詳しく描きながら、命について子どもに考えさせられる作品が増えることが望まれる。

死が扱われている絵本の読み聞かせを行ったことにより、死、葬儀、命に関する幼児の認識が若干ではあるが、適切な方向に変容したことが確認できた。ただし、1回限りの読み聞かせでは、変容の効果は大きいとは言えなかった。また、死に関する誤った情報をテレビアニメやゲームなどから得ていると、歪んだ情報が強烈な印象として残り、その後認識が修正されないことがうかがわれた。幼児が適切な認識を形成できるように、今後、保育や家庭の中で、死、葬儀、命について絵本などを用いて伝えていくとともに、葬儀や墓参りに子どもを同伴し、命について考えさせる機会を設けていくことが大切であると考えられた。

文献

アルフォンス・デーケン (2001) 『生と死の教育』, 岩波書店

藤井祐治 (2002) 子どもが考える「死の概念」の発達, ターミナルケア, 12, 88-92.

金森俊朗 (1996) 『性の授業 死の授業—輝く命との出会いが子どもを変えた—』, 教育史料出版会.

黒田恭史 (2003) 『豚のPちゃんと32人の小学生—命の授業900日—』, ミネルヴァ書房.

近藤卓 (2007) 『命の教育の理論と実践』, 金子書房

村井淳志 (2001) 『「いのち」を食べる私たち—ニワトリを殺して食べる授業「死」からの隔離を解く』, 教育史料出版会.

仲村照子 (1994) 子どもの死の概念, 発達心理学研究, 5, 61-71.

佐藤喜世恵 (2001) 子どもの心が動く健康教育をめざして—「死」を考える—, 名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要, 46, 137-143.

鈴木哲也 (2009) 理科教育における生命倫理の授業開発 (1)—「脳死と心臓死」から「クローンとES細胞」への連続した授業を通して—, 埼玉純真短期大学研究論文集, 2, 73-79.

高橋薫子 (2009) 養護教諭の行う命の教育, 近藤卓編著『いのちの教育の考え方と実際』, 至文堂, 94-102.

徳田克己 (1994) 障害者とのネガティブな接触体験の分析, 谷村裕教授退官記念論文集, 1, 85-91.

徳田克己 (2006) 「ひとの死」から学ぶ「命」の大切さ 1, 仏事, 11, 24-28.

辻本耐・中谷素之 (2008) 幼児期における死の概念の発達的变化, 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 704.